

鬼ごっこを活用した環境教育の実践

(鬼ごっこ総合研究所 研究員) 松尾 泰範・(東京農業大学大学院農学研究科(修士)) 渋谷 翔夢

Practice of environmental education using onigokko

(Onigokko research institute researcher) Yasunori, matsuo・(Graduate School of Tokyo Univ of Agriculture (Master)) Shibuya, shomu

キーワード：環境教育、鬼ごっこ、家族

■ 研究背景

地球温暖化、有害廃棄物の拡散、生物多様性の減少など、さまざまな地球規模の環境問題が世界共通の課題として大きく取り上げられている。問題解決のためには、環境や環境問題に関心・知識を持ち、人間活動と環境との関わりについての総合的な理解と認識の上に、環境保全に配慮した望ましい働きかけのできる思考力や判断力を身につけなくてはならない。そのためには環境の保全に主体的に参加し、責任のある行動がとれる態度を育成するための環境教育が必要である。土井(2011)では、環境配慮行動は他者の影響を受け、特に子どもにとって近い他者(親・友人・知人)などが規定因となることが述べられている。今後、現場では家族や友人などを巻き込んだ、より幅の広い環境教育が必要とされる。

■ 課題

現在の日本では、環境教育を家族や友人、知人単位で気軽に行うほどに成熟していないと考える。今回の事例では、誰もが知る鬼ごっこというツールを使うことで、周りを巻き込み、遊びながら自然に触れられるよう配慮した。

■ 研究方法

2013年3月10日に子どもを持つ家族を対象に、ネイチャー鬼ごっこ in 昭和記念公園を開催し、この時期に生育する草花や昆虫の探索、樹高測定など鬼ごっこというゲーム性を絡めた環境教育を実践した。

■ 考察

親も含め、普段触れ合う機会の少ない自然に子どもと一緒に触れ合えて良かったという意見が多く、一定の効果は得られたと考えられる。今後はより定量的なデータの収集が求められる。

■ 引用・参考文献

【1】 土井 美枝子(2011)：わが国の環境教育における意識と行動に関する既往研究の系譜 広島大学マネジメント研究(11), 99-110,

【2】 范琮(2011)：小学校の環境教育が児童の環境意識に与える影響—日中両国を例として— 筑波大学大学院システム情報工学研究科修士論文